平成２８年度 専門部･委員会 活動方針

〔幼年部〕

５０年の節目を迎え次の世代に足利市サッカー協会そして幼年部はどのように考え行動していくのか。

１．「普及活動」の強化・推進

足利市のサッカーを「文化」にするために。サッカーの始まりの多くは幼稚園の低学年からです。幼少期からボール１つで誰でも楽しめるサッカーというスポーツは世界中で人気のスポーツです。しかしながら、足利市のサッカー人口は年々減少しています。なぜか？もちろん子供の減少も１つですが、本当に子供たちが心からサッカーを楽しめているでしょうか？大人にやらされているサッカーになってはいないでしょうか？

幼年部としては、子供たちによる子供たちの為の子供たちのサッカーを推進していきます。子供たちが学校での休憩時間や休日友達と遊び「自分たちでやるサッカー」の楽しさを知った時、周りの友達を誘ってくる。それこそが１番の「普及活動」だと思います。

２．「普及」を受けての「育成・強化」そしてサッカー環境の整備

「今日の結果ではなく、子供が明日どういうプレーをするかという事を楽しみにする気持ちを持つ。」あの名監督、イビチャ・オシムの名言です。この言葉が全てだと思います。サッカー人口が増えても大人が「結果」だけを求めてはそこまでです。

「勝利」をめざし喜びを感じるのも、「敗北」を体験し悔しさを感じそこから学ぶのも子供達でなければなりません。大人は選手らが勝利を目指す為の技術を教え導くだけです。それが自然と育成・強化に繋がるでしょう。

３．「組織」

大人は周りの顔色をうかがったり世間体を気にします。が、この組織の中心は選手です。「プレイヤーズファースト」です。子供たちの将来を背負っています。馴れ合いの「群れ」のままでは駄目です。選手の為に本気で高めあう「組織」にしていきましょう。

話し合いの中で意見の食い違いが有ると思います。衝突した時や摩擦が生じても、みんなで話し合えば矛先を１つに出来るのでは。そしてこの「組織」から育っていった子供が、いずれ「感謝」を持って返しに来てくれるでしょう。本気の指導者となって。そして「文化」につながる事でしょう。

津久井 英二

〔少年部〕

各チームは現在、１年生から６年生までの選手で構成されているが、年々低学年の人数が減少傾向にある。足利市少年サッカー教室で普及委員会、幼年部と連携して多くの子供達がサッカーに関われるようにしていきたいと思う。

大会を通じての育成・強化として、各カテゴリー別に大会を運営し各チームのレベルアップをはかり、審判に関しても経験を積める場にしていきたい。

グラウンドに関しては、本町緑地・五十部サッカー場で、計８面が確保されているが、天然芝のため痛みが激しく、大切に使用していく必要がある。

少年部として、普及・審判・技術委員会があり、各チームから１名を選出してもらい活動している。負担が増えると思いますがよろしくお願いします。　　大 川 和 彦

〔中学部〕

足利市サッカー協会創立５０周年にあたり、会長の指針を受けて中学部部長の目標を以下の様に掲げたいと思います。

『県で戦える選手、チームの「育成、強化」』

昨年度は中体連の県の大会で足利地区のチームが県の上位で戦うことができた。そこで今年度はさらに上位を目指せるように市内のチームで切磋琢磨し活躍したいと考えている。足利市サッカー協会創立５０周年という節目を迎え、さらなる繁栄を求めて、選手・チームの育成と強化を行っていきたい。　　須 藤 俊 介

〔高校部〕

各世代間の交流および組織の活発化を目標に活動を考えています。なかなか高校の部は足利市の行事等に積極的な参加ができない状況でしたが、近年、JFL の補助役員やキッズカーニバルの補助等で徐々に関わりができるようになりました。社会に巣立つ一歩前の高校生世代には、サッカーを通した人間関係の構築の大切さを数多く経験してもらいたいと考えております。各世代間におきまして高校生をどんどん活用していただけますとありがたいと思っています。また高校の顧問間の連携を図り組織の活発化を目指し足利の高校でサッカーをしたいという環境を作り、足利市の発展に一役貢献できたら良いと思います。

大久保 晶啓

〔社会人部〕

サッカーは近年、日本でそして足利でも子供から大人までメジャーなスポーツとして楽しまれています。ここ数年サッカーを楽しむ子供の数は増えていますが、大人になってもサッカーを続ける人は減少し、ここ10年で足利市登録のチームは半数以下に減少している

のが事実です。
その事実を受け止めたうえで何が必要なのかと言えば、それはグラウンドです。サッカー経験者・未経験者関係なく、市民誰もがサッカーを楽しめるように環境整備が必要不可欠になります。
ですが、人がいなければグラウンドを作る意味もなく、作っても貰えないでしょうし、もし環境が整っても、その環境を正しく次の世代へと整備していける人材の育成が必要になってきます。
例えば20年前なら、高校卒業時に各高校のＯＢチームが結成されチーム内に何人ものリーダーが現れ、時には枝分かれし、毎年いくつものチームが生まれていました。しかし、少子化問題などの時代の流れで現在は、高校卒業時に自分達でチームの立ち上げが難しくなっております。そのなかでも、やっと集まりチームを立ち上げても、リーダーになれる人材がいなくチームとしての活動が出来ないでいるのが現実です。
そこで、社会に出てから何とかしようではなく、他の専門部と連動し、この年代までにはこういった事を出来る様にして欲しいなどと各専門部に目標を伝え、長期で育成をしていくことが大切になってきます。そして、専門部の枠を取り除き、短期でのディスカッションを繰り返し、力を合わせ組織の活性化を図ることが出来た時には、足利に一人でも多くのサッカーに携われる社会人を増やしていけるのではないかと考えています。
会長の指針の中で最後に（リスペクト）とありますが、先ずは私たち協会の一員がお手本となり、一人一人が世代を超えたリスペクトし合える協会にしていけるように社会人部も尽力していきたいと考え行動に移して行こうと思います。

中 村 和 也

〔シニア部〕
①シニアとしての楽しいサッカーをめざす。
シニアとはいっても、その年齢は幅が広く35歳～55歳程度と20歳の開きがあります。35歳主体のチームと50歳主体のチームが対戦してもお互いに楽しくないのは明白です。一時は、11チームあったシニアリーグも、高齢化により人数が揃わず、登録を見送るチームが増えております。今後現在のシニアのカテゴリーをスーパーシニア（45歳以上）と2つに分けて運営できるようにすること、及び少年チームの父兄等のサッカー未経験者の取り込みを積極的に行うことで、よりなだらかな裾野になるよう
活動いたします。

②他専門部との交流拡大。

現在社会人もチーム数が減少しております。このままでは当然シニアの人数が減少することになります。昨年フェスティバルで社会人との交流戦をはじめて行いましたが、今年度も継続し社会人からシニアにスムーズに移行できる体制作りを行います。同様に、ここ数年、45歳以上のスーパーシニアで女子部との交流戦を実施しておりますが、ほぼ同じような戦力であり、楽しい時間を共有できました。また、「相手にケガをさせない」との意識が、シニア同士での試合にも浸透してきております。今年度もフェスティバル以外にも数多くの交流を行います。

③その他

シニアの場合、体も硬くなり、足腰が衰えてきたメンバーも多いことから凹凸のあるグラウンドでは常にケガがつきまといます、シニアにとって平らで転んでもケガのしにくいグラウンドでプレーできることが最大の希望です。サッカー専用グラウンド（人工芝）の建設を熱望いたします。

長　栄 一

女子部

①普及活動の強化推進

サッカーはプレーヤーだけのものではなく一般にも広くそのスポーツを受け入れられる環境を整えていくべきであり、女子選手が多様に市民活動に関わりを持つ事で応援してくれる人、興味をもってサッカーを始める人を増やし底辺を広げる活動を行ってまいります。

②普及を受けての育成・強化

足利の協会の一員として活動するチーム、選手、スタッフに対し世代やカテゴリーを超えた育成を行ってまいります。自分の地元でサッカーを続けていきたい選手の為に一貫した女子サッカーの環境作りこそがその強化に繋がっていくと考えます。

③組織の活性化

足利の女子サッカーの普及に伴い、幼年部、少年部、中学部、高校部との交流が増えた事等、協会所属の組織として機能出来つつあります。会話、理解、交流を行うことでお互いのリスペクトを生み活性化に繋げていきます。一人一人がお互いを自分の事ととらえて行動をする機会を増やし、責任を持って携わる事から次世代を担う事の出来る経験を重ねてまいります。

板橋　稔

〔審判委員会〕

選手が戸惑うことなくプレーできる試合環境を整えてあげることが、審判の役割としてとても重要です。審判の下した判定が結果的に試合をおもしろくすることはあるかもしれま

せんが、あくまでもおもしろいゲームを作るのは選手で、プレイヤーズファースト、選手あっての審判です。

審判の育成がよい選手の育成につながるということはいうまでもなく、そのためには多くの方に審判活動に関心をもってもらうことが大切です。練習時のミニゲームから公式戦までと審判の機会は様々ですが、ジュニアの保護者、社会人選手、チーム指導者等、サッカーに携わる多くの方々に審判の楽しさを感じていただけるよう審判機会を提供し、支援していきたいと考えています。審判のレベルを上げるには、協会が育成するだけでは限界があります。審判を目指すに値する雰囲気を皆でつくっていくことが大切です。

駒 場 史 明

〔技術委員会〕

技術委員会としては、まず新たに技術委員会の組織づくりを掲げたいと思います。現状では、各カテゴリーの連携は良いかと言えば、全く厳しい状況です。各カテゴリーの指導者が意見交換などの場を設けること、特に少年部、中学部、高校部など(トレセン関係)はやらなければいけないことだと考えています。育成から強化に行く為にも、育成と強化を同時に行う為にも、意見交換は技術委員会として十分把握するということです。

今年度は、各カテゴリーの日程を調整して指導者研修会を実施し、指導者の向上を目指したいと思います。指導者が選手との出会いで変わるのではなく、選手が良い指導者との出会いで変わるからです。

丸 山　勉

〔普及委員会〕

年々子供の減少と、趣味の多様化などで幼年のサッカー人口の減少が見受けられます。足利市ジュニアサッカー教室で市内の小学校（3年生以下）にお知らせのチラシを配布しサッカー教室の開催で多くの子供たちにお知らせした上でサッカーを親しむスタートとして、これをきっかけに多くの子供たちが各チームに入り、活動を継続してほしいと思っております。

また、レディースフットサル教室では、高校生以上の女子を参加対象とします。技術の向上、運動不足の解消、ストレス等の発散の場として、この活動を多くの市民に知らせ、継続して行きたいと思います。

幼年、少年、中学、高校、社会人、シニア、女子の普及活動を中心にサッカーファミリーを増やしていき、また、専門部・委員会の協力のもと、色々な世代が一緒に楽しめるよう、普及活動を続けていきたいと思います。

近 藤 正 和